

1. 評価報告概要表

【評価実施概要】

事業所番号	2472900113
法人名	医療法人 豊和会
事業所名	グループホーム やまもも
所在地 (電話番号)	志摩市阿児町国府字南草1061-153 (電 話) 0599-46-1127

評価機関名	三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成 21 年 3 月 6 日(金)

【情報提供票より】 (H21年2月10日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 12 年 4 月 1 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	8 人	常勤 6人, 非常勤 2人, 常勤換算 7.7人	

(2) 建物概要

建物構造	木造 造り		
	1 階建ての	階 ~	1 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	50,000 円	その他の経費(月額)	9,000 円~
敷 金	有(円) <u>無</u>		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(円)	有りの場合 償却の有無	有 / 無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 1,200 円		

(4) 利用者の概要(2 月 10 日現在)

利用者人数	9 名	男性	2 名	女性	7 名	
要介護1		名	要介護2		2 名	
要介護3		3 名	要介護4		3 名	
要介護5		1 名	要支援2		名	
年齢	平均	89.4 歳	最低	81 歳	最高	99 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	豊和病院
---------	------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

国府(こう)の集落から少し離れた過疎の地域ではあるが、自然環境のよい丘陵地に事業所はある。利用者と職員の馴染みの関係から醸し出される落ち着いた家庭的な雰囲気をもった事業所である。希望者の体験入所(1~2週間)で、「帰る、帰る」と外に出て行く利用者に対して、職員は必ず一緒について「出る、戻る」を、事業所に馴染んで外に出る回数が減るまで繰り返し、入居中の徘徊のある利用者に対しても職員が一緒について出る等、利用者寄り添った見守りのケアを徹底していることがこの事業所の特徴である。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前年度の改善課題は、「地域との関係性を重視した理念の追加」「グループホーム独自の『たより』の発行」であった。いずれも改善の取り組みがされている。
重点項目②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	管理者、職員は自己評価の意義を理解しており、職員全員で取り組んでいる。会議で話し合い改善できるところは早急に取り組んでいる。
重点項目③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	運営推進会議は2ヶ月に1回の開催を継続している。事業所の報告以外に参加者からも意見が出され運営に活かしている。
重点項目④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	利用者への家族の面会が多い人で月2~3回、少ない人で2ヶ月に1回はある。来訪時には必ず家族に声をかけ意見・苦情を聞くようにしている。志摩豊和苑の第三者委員会でも苦情を受け付けていることを説明している。
重点項目⑤	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	老友会のカラオケクラブ、手芸クラブに参加し仲間ができた。カラオケ教室の人たちが事業所を訪問してカラオケを楽しんだり、畑仕事を手伝ったりして活発に交流している。

2. 評価報告書

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	設立当初からの理念「ゆったりとした雰囲気の中で・・・」に、前回調査の改善課題となった「地域密着」の考えを取り入れ、「地域との交流を大切に信頼されるホームをめざします」を職員全員で話し合っってサブ理念としてつくりあげた。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	月1回の「やまも会議」(職員会議)で前回の課題であった、サブ理念を作り上げ、その過程で理念全体も検討され共有が図られている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	事業所は国府(こう)地区の集落から離れているが、老友会(老人会)のカラオケクラブ、手芸クラブに参加し仲間ができた。カラオケ教室の人が事業所を訪問しカラオケを楽しんだり、他のクラブの仲間も事業所の畑づくりを手伝ったりして活発に交流を行なっている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価は管理者、職員全員で取り組んでいる。前回調査の外部評価の結果について、会議で評価内容と改善課題を話し合っって指摘された項目の改善に取り組んだ。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は2ヶ月に1回の開催を継続している。出席者からの意見も出されケアに活かしている。民生委員から地区の独居老人に「事業所の畑を作らせてほしい」と要望も出され取り組んでいる。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市の担当者から「認知症の取り組みについて」の勉強会を事業所で開催してほしいと依頼(要望)があり、地区の人対象に施設を見学後認知症の話聞く「勉強会」を実施した。会議以外でも市とは行き来する機会が多い。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	法人が発行する「豊和会だより」の中に「グループホームやまもも」が含まれているが、グループホーム独自の「たより」を発行することが前回調査の改善課題であった。昨年4月から事業所独自に利用者一人ひとりの「たより」を発行し家族に送っている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会は多い人で月2～3回、少ない人で2ヶ月に1回である。面会時には家族に必ず声をかけ意見、不満、苦情を聞くようにしている。志摩豊和苑の第三者委員会でも苦情を受け付けていることを説明している。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	地区にある法人内の異動はある。事業所を去るときの利用者への別れはかえってダメージが大きいので挨拶はしないこと、新しい職員は早く利用者に馴染めるよう関わりを多く持つこと等に配慮している。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修には参加している。地区の法人事業所全体で職員からの希望やケアの習熟度を勘案した短期的な研修計画を作成して研修を行なっている。資格取得のための勤務配慮等の支援も行なっている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県グループホーム協議会や志摩市介護サービス連絡協会にも加入しており、グループホームどうしの交流や意見交換を行っている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居希望者の体験入所(1~2週間)を行なっている。帰宅行動には職員と一緒に帰る(戻る)を繰り返し、徐々に馴染めるようにしている。居室を自宅のレイアウトと同じように配置したり生活で役割を見つけるなど、環境に慣れるよう工夫している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は利用者を上から見る立場に立たないこと、関わりは「ゆっくり・待つこと」「笑顔で」等を心がけている。管理者は他の施設から来た職員には「施設のやり方を押し付けけないこと」を教育している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	これまでに飛行機に乗りたい希望(名古屋~福岡旅行実施)、「コンサートに行きたい」「孫の結婚式に出たい」等、日常の関わりの中で1人ひとりの希望、意向を確かめ実施している。強要することなく本人思いの生活を大切にしている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	介護計画は、本人・家族の意向を確認し計画を管理者(ケアマネージャー)が立案、「やまもも会議(職員全員)」で意見交換を行なって作成している。家族には説明し了解を得ている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	3ヶ月に一度の見直しを原則としている。管理者は利用者が「変わらないか」担当者から聞いて見直し案を作り、月1回の会議でモニタリングし計画を見直している。状態変化時は随時見直しを行なっている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	看護師が常駐しており医療連携体制をとっている。通院介助、受診支援も行なっている。特別な外出支援として孫の結婚式に出席、名古屋での「氷川きよしコンサート」観賞、飛行機搭乗旅行など、いずれも職員付き添いでの支援を行なっている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人のかかりつけ医継続を基本としている。現在3名がかかりつけ医を継続しており、事業所から月1回本人の状況報告を手紙で送っている。6名は併設の病院を利用している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	看取り・ターミナルケアは行なわない方針を入居契約時に本人、家族に説明し了解をとっている。看護師とは24時間連絡が取れる体制があり、事業所で対応が困難になれば家族と話し合い病院や施設を紹介することになっている。		
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	利用者1人ひとりのプライバシーを損ねる言葉かけ、特に共用の場所でのトイレ誘導時は他の利用者に聞こえないように細心の注意を払うよう職員全員で方針を共有している。書類等は事務所で保管しているが来訪者に個人名が見えないよう置き方にも工夫している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の基本的な流れはあるが、本人の気持ちを尊重し「決まり」に拘らず、その人に合わせた暮らしが出来るよう支援している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の買い物、調理、配膳、片付け等、出来る利用者は手伝って食事作りをしている。ビージーエムにモーツァルトが流れ、利用者と職員は楽しく会話しながら同じ食卓で同じ物を食べている。今年から食器、湯のみ、お箸は個人別になっている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	基本的には隔日(週3回)午後、4~5人ずつ交代で入浴している。風呂は毎日沸かしており、希望があれば毎日入浴は可能である。(希望はない。)		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	畑仕事、食器拭き、洗濯物たたみ等、1人ひとりの力が発揮できるよう役割を持った生活の支援をしている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	希望に応じて散歩、買い物、ドライブに出ている。散歩は隣接の老健施設を含めた敷地を一周するコースで日常的に行なわれている。月2回は「在宅支援センター」で催し物(歌謡コンサートなど)があり観賞に出かけている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	管理者や職員は鍵をかけることの弊害を理解しており、居室や日中玄関と裏口には鍵をかけていない。この2箇所には人が通れば違った音のチャイムが鳴るので職員は一緒について出ていくことになっている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	年2回消防署の指導による隣接の老健施設と合同の消火避難訓練を実施している。内1回は夜間想定の実施している。避難場所は苑の駐車場になっている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	隣接老健施設の管理栄養士の指導により栄養バランスを考え一日30品目を摂取目標にした献立を作っている。食事摂取量は毎日記録している。水分摂取量も一日1リットルを目標に、必要な人には夜間補給も行い記録している。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間としての居間、食堂、調理場が同じフロアにあり、調理台の前面は鏡張りになっていてフロア内の利用者の様子がわかり会話しながら仕事ができる構造になっている。ホールには七草・クリスマス・節分など季節感を感じる飾り付けをしている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入りロドアは引き戸になっていて各部屋には洗面コーナーも附設され使いやすい居室となっている。自宅で使っていた馴染みの家具や物品を持ち込み、居心地よく暮らせるよう家族と相談して自由に居室の配置をしている。		